

付さして錐の柄の長いのを持て立て居ります、世話方は羽織袴でうろくして居る、群衆はウワく云ふて居ります。

「モシ、甚い人だすなア」

「なんし久し振の富だす依つてに」

「然し誰ぞ當る人がおますねんなア」

「そらこないに澤山居る中で運の宜い人に當りますねん」

「ア、左様か、貴方も買ふてなあるのか、貴方も、貴方も、あんたはんも」

「モシ、餘計やおまへんが一枚だけ買ふてます、見とくなはれ是だす、番號が宜ろしい辰の八百五十番、是があたいに當ります」

「さよか、一番だつたか」

「イ、エ、一番は當りまへん、二番の五百兩是があたいに當ります」

「左様か、決つてまんのか」

「へエ、昨晚神さんのお告げがおましたんで、二番の五百兩はお前にきつと當てて遣るよつてにあてに仕て待て居れと」

「本當だすかいな」

「へエ——、もし五百兩當つたら何をすると思ひなはる」

「そら人の事で解りまへんなア」

「けども人間には想像と云ふ物がおます、何すると思ひなはる」

「まあ貴方の事やさかい地所でも買ふて家でも建てなはるのやろ」

「それが違ひまんねん、十人寄れば十腹と云ふて、思ふ事が違ひます、あて五百兩當りましたら、直ぐに、大丸へ走つていつて、濱縮緬を一反買ふて来て、それを京へ紺に染めに遣りまんね、染つて來たら真中から、プツツと二つに切りまして、其れで長い財布を拵えまんね、五百兩をこまかい物に替えて貰ふて此財布の中へほりこみまんね、くるくると巻いてふところへ入れますと、布袋はんの様が腹がふくれます、新町にあての女が一人出てます、年がテンナラ、テンナラ二十二だす、丸ぼちやで色の白い鼻筋の通つた髪の毛の濃い、笑ふと鬚の這入る、えへ………」

「モシ惚氣だすか」

「惚氣やおまへん、まあ、聞きなアれ、いつもは、すうと、行つて、すうと、上るのに久し振りで行くのに、此方の方から、手拭を肩に掛けて、此様な處へ、びんこつを入れて、鼻唄もんで、赤えり………」

「大きな聲やなア」